

一七 乞食の出産祝（文化三年九月）<sup>※1</sup>

『文化句帖補遺』<sup>※2</sup>所収。前条の文のすぐ次に「廿七日、晴」として出ている。たゞし『文化句帖』の同日の条には、この文に見合う記事はない。

下総国布川の郷、<sup>※3</sup>来見寺のかたはら田中の塚<sup>※4</sup>に、菰四五枚引張て、酒しひる叟有。味噌するわらハ有。あやしと木がくれてうかがひ侍るに、初孫まうけしなど笑ふ声して、いとゆうに志もやさしげなる青女<sup>※5</sup>の、麻といふもの髻にまき添へ、花なでしこの雨をおびたるさまに少打しほれて、なやめる容の白地に見ゆ。かゝるいぶせき藪原にあるべき体とはおぼへず。まさしく百鬼のふしぎをなすか。狐狸の人の目くらますかと、ある里人に問へば、是ハ此辺りの門に立て、一文半銭の憐ミをうけて、世をすぐす古乞食となん。誠に其樂しむ所、王公といふとも此外やハあるべき。財たくはへねば、ぬす人のうれひなく、家作らねば、火災のおそれもなし。幸にして心をやしなふことハ、なか／＼禄ある人にも過たりといふべし。綾羅錦繡のうつくしきも、彼等が目には雀蚊虻の前を過るとや見ん。いで此うち<sup>※6</sup>の趣ハ、離妻が目にもいかで見分べき。今宵ハ

嫡子ちやくし初七夜の祝つどへひに其党つどへを集つどへて、子孫長久祈いの  
るなるべし。

赤子慣からうけならはすや夜の露

(青字の解題及び注は翻訳不要)

注

- ※1 集英社刊『古典俳文学大系15 一茶集』俳文編に付された  
通し番号。
- ※2 同右書校注者、丸山一彦、小林計一郎による解題。
- ※3 利根川の水駅。いまは茨城県利根町。ここに一茶の知己、  
古田月船がいた。
- ※4 曹洞宗の寺。山号瑞竜山。
- ※5 若い女。
- ※6 中国古代の人で、千里眼のように目が利いたという。

七六 瘦せ桜※1（文政三年春）

※2『一茶真蹟集』に見える前条と一つづきの真蹟である。句は『おらが春』に見えるものがあるから、旧作も利用したのであろう。

雨露の恵みに草木一夜に青ミわたりて、花もま  
れく咲はければ、そろりくと人々立出る二、

けふもまたさくらくの噂かな

行水ゆくのふたとび帰らず、散る花の梢こすゑにもどら  
ぬくひは、我身悔も同じ事ながら、春は花、秋は月  
詠ながむるる心二なるぞをかしくなん。

桜※3へと見へてじんく端折ばしより哉

茶屋※4むらの一夜二わきし桜哉

寝並※5んで遠見ぎくらの評義（議）哉

一雫※6天窓なでけり桜から

今迄※7ハ罰ばちもあたらず花の雨

つくぐ思ふに、おのれ住すめる柏原ハ、信濃のお  
くの小隅こすみなる物から、上と国とハ異り、さくらも  
瘦せて、さながらおのが影法師二似て、誰問とふ者

もなく、花はつやなく、何となく見すぼらしく、

外の花にくらぶれば仙人ほかの如し。

花ながらさくらといふが耻はづかしき

(青字の解題及び注は翻訳不要)

注

- ※1 集英社刊『古典俳文学大系 15 一茶集』俳文編に付された通し番号。
- ※2 同右書校注者、丸山一彦、小林計一郎による解題。
- ※3 『おらが春』に見える。
- ※4 同右書に見える。
- ※5 同右書、中七「遠夕立の」。
- ※6 同右書、下五「ひきがえる」。
- ※7 同右書、下五「昼寝蚊帳」。

八九 田守の翁※1（文政五年三月）

※2 『まん六の春』に前条につづいて出ている。前後の句が『文政句帖』の五年三月の条にみえるから、この月の作であろう。栗生純夫氏は、日記の二月十五日の条に「旦雨。巳刻雷雨。上条九郎兵衛雨泊。横倉中島二入」とある記事がこれに当たるとした、湯田中から横倉の中島雲里のもとへ行く途中、九郎兵衛という農家に雨宿りした時のものとするわけだが、確実ではない。

爰こゝの主あるじまた云ひけるへ、今朝とく起出でと見  
るに、水鳥の一群、とほくの田面たのもより夥おびただしく  
立行たちゆきけるを見しとなん。「此このあたり年としぐくにきたれ  
る鴈鴨かりかものたぐひ、一夜宿りて立ち行ゆくならひ、  
それよりへ一日いちにちぐくと芹せりも青あ、小袖一皮せうそへぎに  
暖ぬくなり行きけり。さりながら、歌一首うたよまず、  
画一枚えものさで、ひたすらに田守り耕うして老おいい  
行くことの浅あはしき業わざならずや。」といへば、「さ  
にあらず。六十※3の齡よはひを累かさぬれども、未だ一粒  
米こめだに作つくらず、穀こく盗ぬす人びととのゝ罵ののしられて、罰※4もあた  
らずふしぎに長ながらふるこそ、恥はおときことにな  
ん。」といへば、主はじめてからくと笑わらひけり。

（青字の解題及び注は翻訳不要）

注

※1 集英社刊『古典俳文学大系 15 一茶集』俳文編に付された  
通し番号。

※2 同右書校注者、丸山一彦、小林計一郎による解題。

※3 この年一茶六十歳。

※4 「耕ずして喰い、織ずして着る体たらく、今まで罰のあた  
らぬもふしぎ也。花の影寝まじ未来が恐しき」(『文政九・  
十年旬日記写』)

(「乞食の出産祝」「痩せ桜」「田守の翁」、集英社刊『古典俳文学  
大系15 一茶集』丸山一彦 小林計一郎 校注 所収)